人権だより

八幡浜高校　人権委員会　令和５年度　３月号

　あっという間に今年度も終わりが見えてきました。来年度も自分たちの目標に向かって頑張りましょう。

　さて、話は変わりますが１月１日に起きた能登半島地震により、たくさんの被害が出ました。その中でも、地震で被災した外国人の中には、言語の壁があったことにより、避難所に入れず、食料などが確保できない人もいたそうです。また、震災時にはＳＮＳで、外国人が震災に乗じて犯罪をしているといったデマゴギーが流布されるなど、本来助け合うことが最も必要とされる場面に、分断を煽る事態が発生しました。
　また、トランスジェンダーの方々もこうした災害において被害を受ける可能性が指摘されています。震災時における人権について調べる中で、以下のような課題が見つかりました。
　・共同利用であるお風呂やトイレの利用をためらってしまう。
　・パートナーの安否情報を得ることができない。
　・避難所で家族として認識されない。
　・性適合手術後に必要なホルモン注射を受けられなくなった。
　・配慮を求めることそのものに対するハードルが高い。
　実際に、東日本大震災の際には、性自認に基づいて女性の服装で外出したトランスジェンダーの被災者が、津波の危険があるのに着替えのため、自宅に戻った例がありました。
　このように、「外国人だから」「トランスジェンダーだから」という理由で避難場所に入りにくいと感じている人がいます。災害時という緊急時こそ、最も人権が尊重されることが重要なのではないでしょうか。人権について、様々な場で取り上げられる機会が増え、色々な人の考え方や感じ方を尊重するという考え方が浸透してきてはいますが、当事者の方々がまだまだ生きづらさを感じているのも事実です。これらを個人の問題として捉えるのではなく、社会の問題として向き合っていきたいと感じました。
　自然災害と人権問題。災害が起こると、復興事業が優先されますが、全ての人々が幸せに暮らしていくためにも、このような人権問題の解決もしっかり怠らずにしていくべきだと思います。

～人権・同和教育課より～

今回は、令和５年度八幡浜市人権尊重作品で人権詩で優秀賞になった３年３組の小西麗愛さんの作品を改めて紹介します。

青海波（せいがいは）

　キラキラした海が好き
打ち寄せる海の泡も
引き波の水際の模様も
心穏やかに
　足元の石ころたちは
どれも丸くて
裸足で歩いても
傷つけない
波にもまれた石ころたちは
優しい
　私もこんな石ころたちのように
誰も傷つけない人になりたい
　そうした海のように
誰かを癒やせる人になりたい

きれいな海がある町で生まれ育った小西さんは、どんな時も海を見ると、心が穏やかになったそうです。小西さんは「平穏」や「幸せ」という意味の波の模様である「青海波」という題名をつけ、様々な経験を通して、人に優しく、この海のように誰かの心を穏やかにすることができる人になりたいという思いを込めて作られました。

この詩を読むと情景がすぐに目に浮かび、心が癒やされます。先行き不透明な現代において、あらゆるものに恩恵をもたらす広い海のように、私たちも、寛大な気持ちを持って、素直に他人の幸せを願うことができるようになることが大切なのではないかと思います。